



・発行・  
京都障害者  
スポーツ  
振興会  
題字 芝田 徳造

# 三重県チーム都大路初疾走!

## 三重県チーム 監督

### 大井 和 夫

この歴史ある全国車いす駅伝に出場できることは、我々にとって非常に喜ばしいことであります。しかも第20回の記念大会というタイミングに初出場できることは、光栄であると感じています。また障害者スポーツに対して、ご尽力されている京都障害者スポーツ振興会の皆様に感謝するとともに敬意を表したいと思います。三重県は障害者スポーツの分野では、遅れをとっている県ではあります。今回の出場はスゴイ一歩だと考えています。我がチームのほとんどの選手が、駅伝出場は初めてで具体的な目標など考えられない状況でしたので、とにかくしっかりと最後までタスキを繋ぐことと、十分楽しも

う、ということを目指に掲げ、参加させていただきました。

三重県は、パラリンピクでのメダリストが出ていますが、前述のとおりで決して障害者スポーツが盛んとは言えません。特に車椅子陸上に関しては、競技人口が極めて少ない県なのです。今回中心選手を抱える、私のチームはASAATCというチームですが、小学生〜一般健常者と障害者の陸上クラブです。総勢110名の選手が所属しています。おそらく小・中学生、障害者が一緒になっっているという体制は、全国的にみても異例なチームではないかと思えます。車椅子陸上選手を中心に選手は、北京パラリン

ピックで2個の金メダルを獲得した伊藤選手と銅メダルを獲得した田中選手です。今回、この2人の願いでこの車椅子駅伝出場を決めました。選手構成も悩みました。伊藤、田中の両選手を中心に車椅子競技歴2年の小林選手、車椅子バスケットの稲葉選手をお願いし、あと1名は田中選手のご主人に選手復帰をお願いし、エントリーできたのです。大会までには、個人練習を中心に行い、合同練習にてチームワークを高めてきました。ロード練習・トラック練習と寒い中集中してトレーニングを行ってきました。

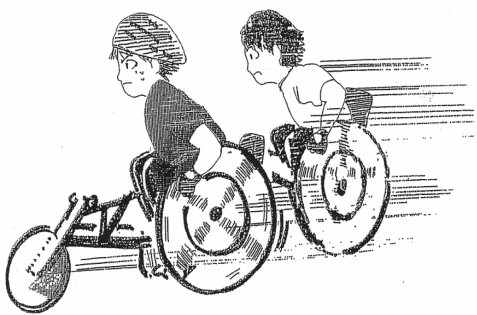
そんなメンバーで臨んだ、初の駅伝は19位と健闘しました。

1区の伊藤選手が区間11位にて2区に繋ぎ、田中(克)選手、稲葉選手とつづき20位で車椅子歴1年の小林選手に繋ぎました。上りの多い4区を小林選手が3人を抜き順位を17位に上げ、アンカーの田中選手へ繋ぎました。終了後各選手は、充実感いっぱい表情で西京極へ帰ってきました。繰り上げスター

トもなく、総合19位という成績は、初出場の我々にとつては十分過ぎるほどの結果でした。

選手一同、こんなに素晴らしい大会に参加できたことを誇りに思っています。また来年に向けての目標も具体的になりましたし、この大会がトレーニングを行つていくうえでの、良いモチベーションの一つになりました。今までの以上に、三重県の障害者スポーツの発展に一翼を担えればという思いで、頑張つていきたいと思えます。

最後に、大会役員の皆様をはじめ、ボランティアの皆様へのサポートに感謝と敬意を表したいと思います。今後ともこの大会が、尚一層発展することを祈念しております。



行事予定	3月	10(火)	丹波障害者のスポーツのつどい	丹波自然運動公園	来月の つどいは  4 / 12  第2日曜日
		11(水)	第14回京都ゆうあいフライングディスク大会	京都市障害者スポーツセンター	
		15(日)	乙訓障害者スポーツのつどい	長岡京市立スポーツセンター	
			210回障害者水泳のつどい	伏見港公園プール	
		22(日)	城陽障害者スポーツのつどい	サン・アビリティーズ城陽	
京都障害者スポーツ振興会ホームページ TEL/FAX075-712-7010					
<a href="http://web.kyoto-inet.or.jp/people/spo-shin/">http://web.kyoto-inet.or.jp/people/spo-shin/</a> (2009年1月25日に一部更新)					

# スポ振ルネサンス

「心でつなぐ活動を！」

京都障害者スポーツ振興会

副会長 水谷 裕

この連載の依頼を受け、『スポ振ルネサンス(再生)』というテーマで昨年4月から書き始め、早くも今月で12回、1年を迎えます。この間、より原点に立って障害のある人々のスポーツ活動の支援をして欲しいとの思いから、様々な観点から率直に訴えてきました。

そこで、少し振り返ってまとめてみますと、

4月号(スポ振ルネサンス1)では、振興会が誕生して37年、活動に関わってきた多くの人々の尽力によって大きく発展してきたが、活動のコンセプトは障害のある人々のスポーツ活動を「支える」ことなのに、支えられてる人さえあることや、川面新会長を迎え、現状を踏まえ「心でつなぐ活動」をして欲しいとの思いで、『スポ振ルネサンス(再生)』を連載するということを。

5月号(スポ振ルネサンス2)では、振興会の分業化が進み、振興会全体を見なくても済む現状や、一過性のイベントに関わるスタッフばかりが重宝がられ、地道に活動をして守り続けてく

れてきたスタッフが軽視されている現状について、指導等が不十分であったことを反省し、原点に返り、誰のために、何を目標に活動するのか改めて考え、活動に取り組んで行きたいということ。

6月号(スポ振ルネサンス3)では、「全国障害者スポーツ大会」の選手の選考会で選抜に苦慮し、「2回目の出場を認めては」という意見が出てきていることに対して、何故、裾野を拡げる手段を講じることを忘れ、短絡的な発想に陥っている本末転倒の話と支援学校の在校生や卒業生を選手として選ぶ時の本人の意思を無視した選び方などへ苦言を呈したいということ。

7月号(スポ振ルネサンス4)では、「全国障害者スポーツ大会」の府・市代表派遣選手に対し、振興会、コーチとして、応えられているのか疑問で、マンネリ化や知識不足から不備な点が目立つなど、資質や力量さえ疑いたくなる話が多すぎ、緊張感を失っているのではないかと、自らを律して選手に範を示すべきということ。

8月号(スポ振ルネサンス5)では、古くからのスタッフ等を一步駒としてしか扱っていない現状や、障害のあるスタッフに対する対応や

事業の中での位置づけなどの在り方に首を傾げざるを得ないことと、障害のある人々のスポーツへの思い入れと高い意識を持つて運営をしなければ、振興会の存在価値が無くなるということ。

9月号(スポ振ルネサンス6)では、振興会37年にわたる実績の上に胡坐を組むことなく、謙虚さを失わないことや、他の団体や人との関係に気を配ることは、障害のある人々のスポーツの普及を進める上で不可欠な環境の下地づくりの基礎で、一部の幹部だけが気を使っただけでは、振興会の存在は認められても、本当の意味での信頼は、得られるものではなく、日頃の態度や対応は、個人の問題であつても、振興会が評価されることになるということ。

10月号(スポ振ルネサンス7)では、振興会は、分業化が進む中、事業進行に必要なスタッフの確保に苦慮をしている専門部とそうでない専門部との格差があることとに対し、事業時に他の専門部から部員をひとりずつ交代で送るような部間の協力体制を構築すれば、その派遣された部員にとつても、担当以外の事業の本質と必要性が理解でき、以後の活動の糧となるという提案をしたと

いうことを。

11月号(スポ振ルネサンス8)では、前号の補足で、事業を進めるに必要なスタッフが確保出来ても、専門部には専門性があり、それぞれの立場を持って活動を行っており、部外から受け入れることで、その人が勝手な動きをし、支障をきたすことを避けたい思いがあるので、事業でのスタッフの役割をより明確にし、行うべきことと、事業活動は、単に専門部会のものでなく、振興会のものであり、各事業も同様に行うことにより、効果は大きく表れ全体の活動となるということ。

12月号(スポ振ルネサンス9)及び1月号(スポ振ルネサンス10)では、振興会や競技種目等の成り立ちについて不十分な認識しかない役員もいるので、活動の原点である「障害者スポーツのつどい」、他府県で生まれて京都で育み育てた「卓球バレー」、京都で生まれた「車いすハンドボール」と「障害者シンクロナイズドスイミング」などの歴史を紹介し、創設に関わられた人の思い入れや意味などを理解し、大切にしようことを。

2月号(スポ振ルネサンス11)では、「全国車いす駅伝

競走大会」のあゆみ、現状や課題を挙げ、とりわけ、駅伝の難しさというが、各地元のスポーツ環境など種々の条件が整わなければ参加が困難なこと、先天性の障害のある選手の姿が殆ど見られないことなど、まだまだ取り組まなければならないことがあるということ。

これまで11回かけて色々書いてきましたが、読んでいただいている方には、「あんなこと書いてもいいの?」「とか、厳しいこと書くねえ」とか意見をいただいています。が、最も読んで欲しい振興会の役員の人たちからの意見は聞えて来ず、書いている苦言に対する反応も見られません。ということ、会の中核を成す役員が、自分達の会の機関誌にさえ目を向けていないということ、非常に残念なこととです。耳ざわり、目ざわりと言われるか判りませんが、それでも、自分は振興会を立ち上げた一人として、新年度も書き続けなければならぬと思っております。

## 全国車いす駅伝競技大会

### 20回連続出場表彰

(敬称略・カッパ内は所属チーム名)

- 伊東 浩之(長崎)
- 吉松 時義(大分B)
- 福場 輝昭(山口)

おめでとうございます